

奈良町書道美術館

1170046 北田崇敏

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻
建築デザイン研究室

1、はじめに

古都奈良。そこは多くの歴史がつまった場所。そこには多くの有名な魅力があり、そしてまた同様にあまり知られていない魅力が存在する。書道もその一つと言える。そんな書道の始まりの街としての奈良が、再発見された魅力を発信していくことを本計画の目的とする。

2、対象敷地

奈良県奈良市の一角、古くからの町並みを残した「奈良町」と呼ばれる地域がある。道幅は狭く車が行き交うことが難しいような地域である。近くには寺や神社があり、街との対比が興味を掻き立てる。本計画では、その町のなかに四カ所の敷地を選定し、四つの建物を提案する。

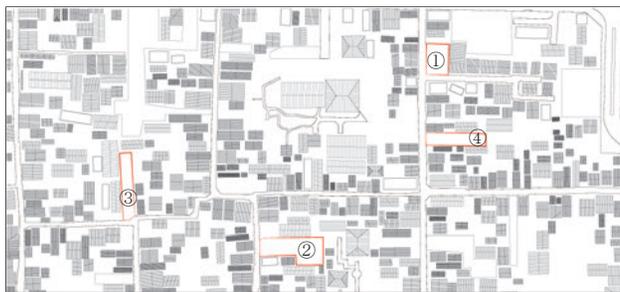


図1、配置図

3、書道の歴史

書道の興りは古く、唐の時代に遡る。その頃日本では弘法大師空海が唐へと旅立ち、多くの学と共に、書道に必要な筆と墨の製法を学び帰り、奈良を拠点に全国へと広めた。さらには楷書の伝聞と並び永字八法と呼ばれる書の技法の学び方を広めたとされる。

4、永字八法とは

書道に必要とされる技法が永の字に全て含まれているとされる楷書の成立と同時期である唐の時代からの教え。その技法は八個あり、一画目から順に側、勒、弩、趯、策、掠、啄、磔となっている。



写真1

5、敷地の問題点

この辺りは道幅が狭いにもかかわらずコインパーキングなどが多く見られる。流入する自動車の増加によって歩行者の流れは妨げられるため、コインパーキングなどの駐車場はこの地域にはあまり相応しくないとされる。さらに、近年奈良市内には大規模な駐車場も出来ているため、小規模の駐車場などは、この歴史ある地域には観光面から見ても存在意義は薄いと考えられる。



写真2

6-1、着目する要素その一

永字八法の8つの技法である側、勒、弩、趯、策、掠、啄、磔をそれぞれの意味するものからイメージを汲み取り、さらにそれを建築へと具現化する。その永字八法の8つの技法を二つずつに分け、四つの敷地へと分配する。

側 点画 筆の側面を使うことから 抉るように書く	策 短い横画 鞭の意 鞭を打つように書く
勒 横画 馬を制する革紐の意 引き締めるように書く	掠 左はらい かすめるの意 髪を梳くように書く
弩 縦画 弓、石弓の形から 筆を反らせるように書く	啄 短い左はらい つばむの意 鳥が木を叩くように書く
趯 跳ね 雉の尾の意 跳び上がるように書く	磔 右はらい 切り裂き内臓を出すの意 切るように書く

写真3

6-2、着目する要素その二

奈良町は、古くから木格子の町としても有名であるため、本計画では入口ファサードの共通デザインとして木格子を採用することとする。



写真4



写真5

7、コンセプト

全体のコンセプトとしては、書道の半紙と墨の色をイメージして白と黒を基調とし、そこへ木格子や木組みで奈良や、奈良町をほのめかすアクセントをつける。和風でモダンで、それでいてシンボリックな見た目を目指す。また、書道の技法を的確に表現し、書道作品を見ていない間も書道をそこに感じられるような内部空間とする。

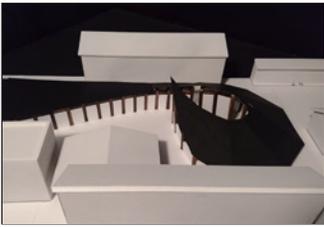


写真6



写真7

8、提案内容

敷地①側、弩

白色の四角い箱型の中に黒色の球体型展示室を設け、黒色球体の特殊性を高める。またその球体の同心円状に床を折り取り弓なりの床スラブを展開し、どこからでも球体を見ることの出来る展示空間を構成する。



写真8



写真9

敷地②側、趨

空間を大まかに明暗の二つに別け、入口から徐々に道幅を狭め圧迫感を与える暗の空間と、その先の空間が広がり光の差し込む明の空間がコントラストを生み出し、明の空間からうっすらと溢れる明かりが暗の空間の期待感を高める。そして外観はすぐに見てわかるように屋根が跳ね上がっていて、趨を表現しているとわかる。



写真10



写真11

敷地③側、磔

長スパンのスロープ二本を交差するように配置し、中心にも地階へ降りる直線スロープを配置することで、上下左右にスロープが鞭のように絡み合う。また、下から覗く上のスロープの隙間は空間を切り裂き黒色天井の曲面を魅せ、スロープ自体は上と下に空間を切り裂き、特徴のある空間へと変容させる。



写真12



写真13



写真14

④掠、啄

間口の狭い細長い敷地で、髪をすくように、そして流れるように流線型の部材を縦に配置し、その流線型部材のスパンを変化させることで、啄木鳥が木を掘って作り上げる穴のように見せる。

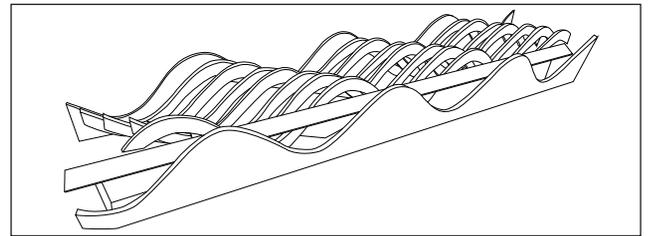


写真15

9、最後に

書道を思わせるモノクロの見た目に奈良町に溶け込む木格子。そんな特徴的な外観に包まれた、四つの敷地の八つの技法。八つの技法を建築へ具現化するにあたり、注意を払ったことを記す。側では球体のサイズ感、弩では引き締まる意味をどう表現するか、弩では球体との調和、趨では目を引く勢い、策では鞭の絡まり、掠では髪のような流れ方、啄では穴と周囲の関係性、磔ではいかにきれいに切り裂くか。これらのことに最新の注意を払った。そして、これらの技法から具現化した建築を感じ、奈良町を歩き回り、書道に触れながら奈良の歴史ある建物にも触れながら観光することが出来るような、新しい美術館を計画した。